

那珂 33

—那珂遺跡群第79次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第756集

2003

福岡市教育委員会

那珂 33

—那珂遺跡群第79次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第756集



遺跡略号 NAK-79
遺跡調査番号 0057

2003

福岡市教育委員会

序

現在、アジアにより一層開かれた活力のある国際都市を目指し、まちづくりを進めている福岡市は、古くからアジア大陸との交流を通じて発展してきました。本市では、この交流を物語る文化財の保護、活用に努めていますが、開発によりやむを得ず失われていく遺跡については、記録保存のための発掘調査を行っています。

本書は、博多区那珂に所在する那珂中学校のプール改築工事に先立って行われた那珂遺跡第79次調査を報告するものです。調査の結果、弥生時代から中世に至る遺構、遺物が発見され、当時の生活を復元する上で多大な成果を挙げることができました。

最後になりましたが、発掘調査から整理、報告に至るまで、関係者の皆様には多大なご理解とご協力をいただきました。ここに感謝の意を表するとともに、本書を文化財保護や普及、教育などに活用していただければ幸甚に存じます。

平成15年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 生田征生

例　　言

1. 本書は福岡市博多区那珂2丁目18-1における那珂中学校プール改築工事に先立ち、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成13年12月8日から平成14年2月16日にかけて発掘調査を実施した那珂遺跡第79次調査の報告である。
2. 検出した遺構については、住居址はSC、溝はSD、井戸はSE、土坑はSK、ピットはSPとし、ピット以外は一括して通し番号を付した。
3. 本書に掲載した遺構の実測は担当の井上蘭子の他、吹春憲治、桑原美津子が、写真撮影、製図は井上が行った。
4. 本書に掲載した遺物の実測、製図、写真撮影は井上が行った。
5. 本書の執筆、編集は井上が行った。
6. 本調査の出土遺物、記録類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理されるので活用されたい。

遺跡調査番号	0057		遺跡略号	NAK-79	
調査地地番	福岡市博多区那珂2丁目18-1				
開発面積	816m ²	対象面積	816m ²	調査面積	746m ²
調査期間	2000年12月8日～2001年2月16日			分布地図番号	24・38-0085

目 次

本文目次

I.はじめに	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査体制	1
II. 遺跡の立地と環境	
1. 遺跡の立地と歴史的環境	2
2. 周辺の遺跡	2
III. 調査の記録	
1. 調査の概要	6
2. 遺構と遺物	6
①住居址	6
②溝	6
③井戸	11
④その他の出土遺物	18
3. 小結	19

挿図目次

第1図 那珂遺跡群と周辺の遺跡 (1/50,000)	3
第2図 那珂遺跡群調査地点位置図 (1/8,000)	4
第3図 本調査地点の位置 (1/500)	5
第4図 遺構平面図 (1/100)	折り込み
第5図 SC06・SC30 実測図 (1/60)、出土遺物実測図 (1/4)	7
第6図 SD01・SD02 実測図 (1/80)	9
第7図 SD01・SD02 出土遺物実測図 (1/3,1/4)	10
第8図 SD19・SD03 実測図 (1/80)	11
第9図 SE04・SE05 実測図 (1/40)	12
第10図 SE04 出土遺物実測図 (1/4)	13
第11図 SE05 出土遺物実測図 1 (1/4)	15
第12図 SE05 出土遺物実測図 2 (1/4)	16
第13図 SE05 出土遺物実測図 3 (1/4)	17
第14図 その他出土遺物実測図 (1/4,1/3)	19

図版目次

図版 1	1. 調査区北側全景 (東から)	2. 調査区南側全景 (東から)
図版 2	1. 調査区北側東端 (南から)	2. 調査区北側東端 (東から)
	3. SC06 (東から)	
図版 3	1. SC06 (北から)	2. SC06 内 P3 (東から)
	3. SC06 貼床除去後 (北から)	
図版 4	1. SD01 (北東から)	2. SD01 遺物出土状況 (南東から)
	3. SD01A-A' 土層断面 (南西から)	
図版 5	1. SD02 (西から)	2. SD02B-B' 上層断面 (西から)
	3. SD01・SD02 (東から)	

- 図版6 1. SD03 土層断面（東から）
2. SE04 遺物出土状況（北から）
3. SE04 遺物出土状況（東から）
- 図版7 1. SE04 完掘状況（北から）
2. SE05 遺物出土状況第1面（南から）
3. SE05 遺物出土状況第2面（北から）
- 図版8 1. SE05 遺物出土状況第3面（北から）
2. SE05 遺物出土状況第4面（北から）
3. SE05 遺物出土状況（南から）
- 図版9 1. SE05 完掘状況（北から）
2. 那珂中学校（調査区上空から）
3. 調査区上空から北西を望む
- 図版10 1. 調査区上空から南西を望む
2. 調査区上空から南を望む
3. 調査区上空から南東を望む
- 図版11 出土遺物1
- 図版12 出土遺物2
- 図版13 出土遺物3
- 図版14 出土遺物4

I. はじめに

1. 調査に至る経過

2000年7月31日付で、福岡市教育委員会総務部施設計画課より、那珂中学校プール改築工事に先立ち、福岡市博多区那珂2丁目18-1那珂中学校敷地内における埋蔵文化財の有無について事前審査申請が提出された。申請地は那珂遺跡群の範囲内であることから、埋蔵文化財課で敷地内における試掘調査を行った。その結果、現地表下約20cmで遺構面である鳥栖ローム面が検出され、住居址、溝、ピットなどの遺構が確認された。この成果をもとに協議を行い、工事が行われる範囲内においてはやむを得ず発掘調査を行い、記録保存を図ることとした。また、教育委員会施設計画課との間に発掘調査及び資料整理に関する受託契約を締結した。発掘調査は2000年12月8日～2001年2月16日の間に行なった。

2. 調査体制

調査委託 福岡市教育委員会総務部施設計画課

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 生田征生

調査総括 埋蔵文化財課長 山崎純男

　　調査第2係長 力武卓治(前) 田中壽大(現)

調査庶務 文化財修復課 御手洗清

事前審査 濑本正志

調査担当 試掘調査 濑本正志

発掘調査 井上蘭子

調査作業 有田恵子 石川洋子 泉本タミ子 伊藤美伸 乾俊夫 大賀規矩雄 桑原美津子

高着一夫 志章寺堂 柴田博 田中トミ子 鍋山治子 渥地静子 林厚子 播磨千恵子

平井武夫 吹春憲治 福場真由美 藤原直子 北條こず江 水野由美子 森本良樹

整理作業 川田京子 口下部由美子 桑野綾子 坂井かおり 佐々木涼子 橋本麻里 福島由衣子

牧野ミワ 山口とし子

このほか、発掘調査に至るまでの条件整備、調査中の調整等について福岡市教育委員会総務部施設計画課及び那珂中学校の皆様には多くなご理解とご協力をいただきました。ここに深く感謝いたします。

II. 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の立地と歴史的環境

福岡平野は、東から南にかけて背振、三郡山塊に囲まれ、北は博多湾に面し、南北に延びる丘陵と沖積平野を交互に連ねて形成される。その沖積平野を、西から室見川、樋井川、那珂川、御笠川、宇美（多々良）川が貫流し、それぞれの河川により開析された丘陵や段丘によって画された小平野が形成される。ここでいう狹義の福岡平野とは、御笠川、那珂川流域の田舎町郡の一部、那珂郡、御笠郡に当たる部分で、この福岡平野を中心として周辺に重要な遺跡群が点在する。

那珂遺跡群は、御笠川と那珂川に挟まれた平野内に位置し、春日丘陵から那珂川の蛇行に沿って延びてくる洪積丘陵北端に立地する。北側の比恵遺跡群、南側の五十川遺跡群とは連続した台地上にとぎれることなく分布しており、本来連続した一連の遺跡群である。この丘陵は花崗岩風化礫層を基盤として、阿蘇山の火碎流による八女粘土、鳥栖ローム層が最上部に形成される。台地の東西と南側は沖積地であり、2km先の博多遺跡群が立地する砂丘との間は後背湿地となっている。遺跡の範囲は南北約2.0km、東西0.7kmで、現在の標高は約7~10mである。

那珂遺跡群は、今までに87次の調査が行われている。時代ごとに概観してみると、まず、旧石器時代では丘陵の南東縁を中心にナイフ形石器、彫器、剥片等の石器群が出土している。縄文時代においては、晩期前半までの様相は上器片、石鏃、石匙が散逸的に見られるのみである。しかし弥生文化期になると、遺跡群の西側縁辺部で遺構、遺物がまとまって見られるようになる。

弥生時代以降になると集落を中心として遺跡は拡大していく。弥生時代前期は遺跡群の東西の縁辺部で集落が形成され始める。東側で壠塚墓や木棺墓が検出され、西側では二重環濠集落や貯蔵穴などが広がる。中期から後期にかけては、集落は尾根上へと拡大していく。環濠、墳丘墓などが検出されており、出土遺物から青銅器生産が行われていたことが伺え、撲点的な集落が展開していたことが明らかになっている。

古墳時代になると、台地の中央部に、福岡平野の最古期の前方後円墳である全長85mの那珂八幡古墳が築造される。主体部の木棺内からは一角縁神獣鏡が出土している。これ以降6世紀後半まで集落は激減するが、統いて、6世紀後半には那珂八幡古墳の北500mに、東光寺剣塚古墳と剣塚北古墳の2基の前方後円墳が築造される。それと同時に集落も再び増加していく。櫛列に囲まれた大型建物が台地上に分布し、とくに「那津官家」とされる大型建物群が比恵遺跡群北西部の台地上で広がっており、撲点集落として展開する。

古代には、台地中央部に正方位の溝や大型建物、井戸などが広がり、官衙的施設もしくは寺院と推定される。さらに中世には溝で区画された居館遺構が存在しており、那珂遺跡群の中世に至るまでの発展が伺える。

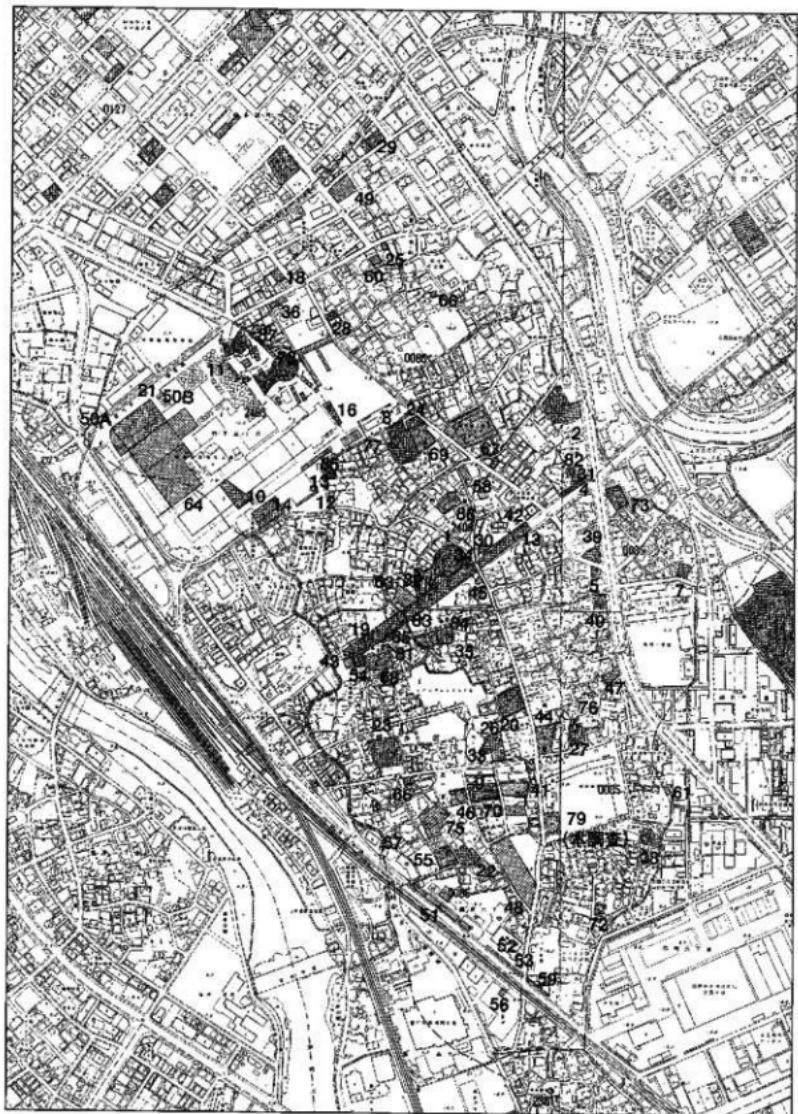
2. 周辺の遺跡

那珂遺跡群と同じ丘陵上で北に接する比恵遺跡群は、那珂遺跡群の動向と半ば連動するように弥生時代~古墳時代において発展している。南に接する五十川遺跡群では、弥生時代、古墳時代の集落や古代の掘立柱建物や中世の居館などが広がる。五十川遺跡群の谷を隔てた南には、弥生時代の青銅器の鋳型が出土し、さらに古代の寺院址や官衙的施設の存在が推定される井尻遺跡群、さらにその南には、「奴岡」の中心遺跡とされる須玖遺跡群が広がる。那珂遺跡群の東に広がる那珂君体遺跡群では、古墳時代の大規模な水田址、井堀、水路などの生産遺構が検出されている。このように、那珂遺跡群が立地する丘陵を中心として周辺には様々な遺跡が広がっている。

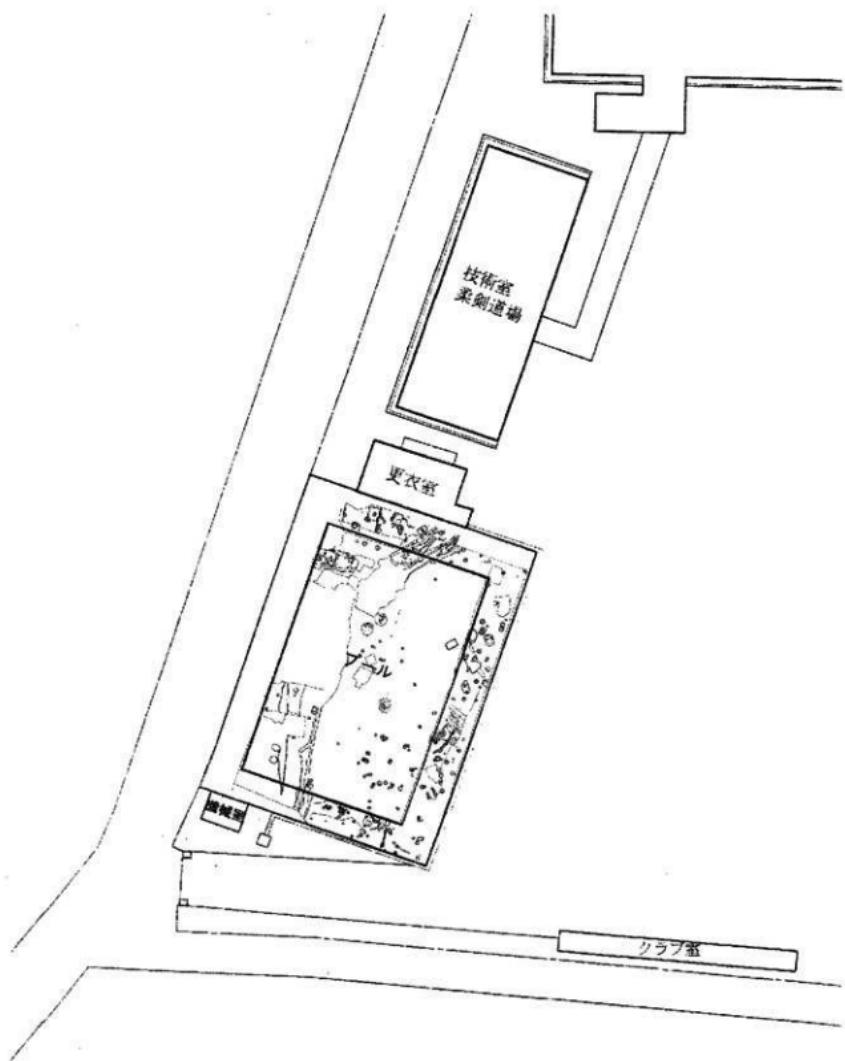


1 箱崎遺跡	7 比恵遺跡	13 諸岡遺跡	19 日佐遺跡	25 宝満尾遺跡
2 吉塚本町遺跡	8 那珂遺跡	14 高畠遺跡	20 錐鉾張遺跡	26 天神森遺跡
3 聖船遺跡	9 那珂君体遺跡	15 麦野遺跡	21 須玖遺跡	27 下月隈C遺跡
4 福岡城	10 板付遺跡	16 和田B遺跡	22 雀居遺跡	28 立花寺B遺跡
5 博多遺跡	11 五十川高木遺跡	17 野多目遺跡	23 斎田曾木遺跡	
6 吉塚遺跡	12 井尻遺跡	18 野多目枯波遺跡	24 久保園遺跡	

第1図 那珂遺跡群と周辺の遺跡 (1/50,000)



第2図 那河遺跡群調査地点位置図 (1/8,000)



第3図 本調査地点の位置 (1/500)

III. 調査の記録

1. 調査の概要

調査区は中学校の校庭の一角にあるため、2000年12月8日に、調査区と校庭との間に安全のためのフェンスを設置することから作業を開始した。11日に機材等の搬入と調査区の表上掘削を開始した。残土置場の関係上、調査区を北側と南側に分け、反転して調査を行うこととした。遺構面は浅い部分では、現地表下20~50cmほどで検出されたが、調査区の中央部分はプール水槽で搅乱を受け、約1mほど掘削されていた。そのため遺構の残存状況は予想以上に少なかったが、興味深い遺構も検出され、遺構検出、遺構掘削を行いつつ、1/100による周辺測量、1/10、1/20による遺構の個別実測、平面図作成、写真撮影を進めた。南側も同様に作業を進め、2001年2月9日には調査作業は終了し、残務処理と調査区の埋め戻しを行い、16日に撤収、調査を終了した。

2. 遺構と遺物

①住居址

2軒の住居址が検出された。

SC06 (第5図)

調査区北西端コーナー付近で検出された。住居址の北側は壁で、南側は搅乱で切られており、中央付近のみの残存であった。方形住居址である。壁溝が残り、主柱穴(P1、P2)が2基、中央土坑(P3)が検出されている。黒褐色土と地山ブロックの混合土が貼床として5cmほど薄く残っていた。また、両主柱穴付近に高まりがあるが、これはベッド状遺構である可能性もある。主柱穴間は2.3mで、柱穴には柱根が残っていた。また、中央土坑から甕の底部が出土している。住居址の主軸はN-8.0°-Wをとる。

出土遺物 (第5図)

1は甕の底部である。底径10.5cmを測り、底部は平底を呈する。外面には縦方向の粗いハケメを、内面にはハケメとナデを施す。径0.5mm以下の砂粒と金雲母をやや多く含み、外面は淡赤褐色、内面は赤褐色を呈する。

SC30 (第5図)

調査区南東寄りに位置する。プール水槽搅乱での検出で、柱穴のみの残存であった。中央土坑と、おそらく6基の主柱穴からなる円形住居址である。柱穴はいくつか重複しており、3~4回の建て直しが推定される。顯著な出土遺物はない。

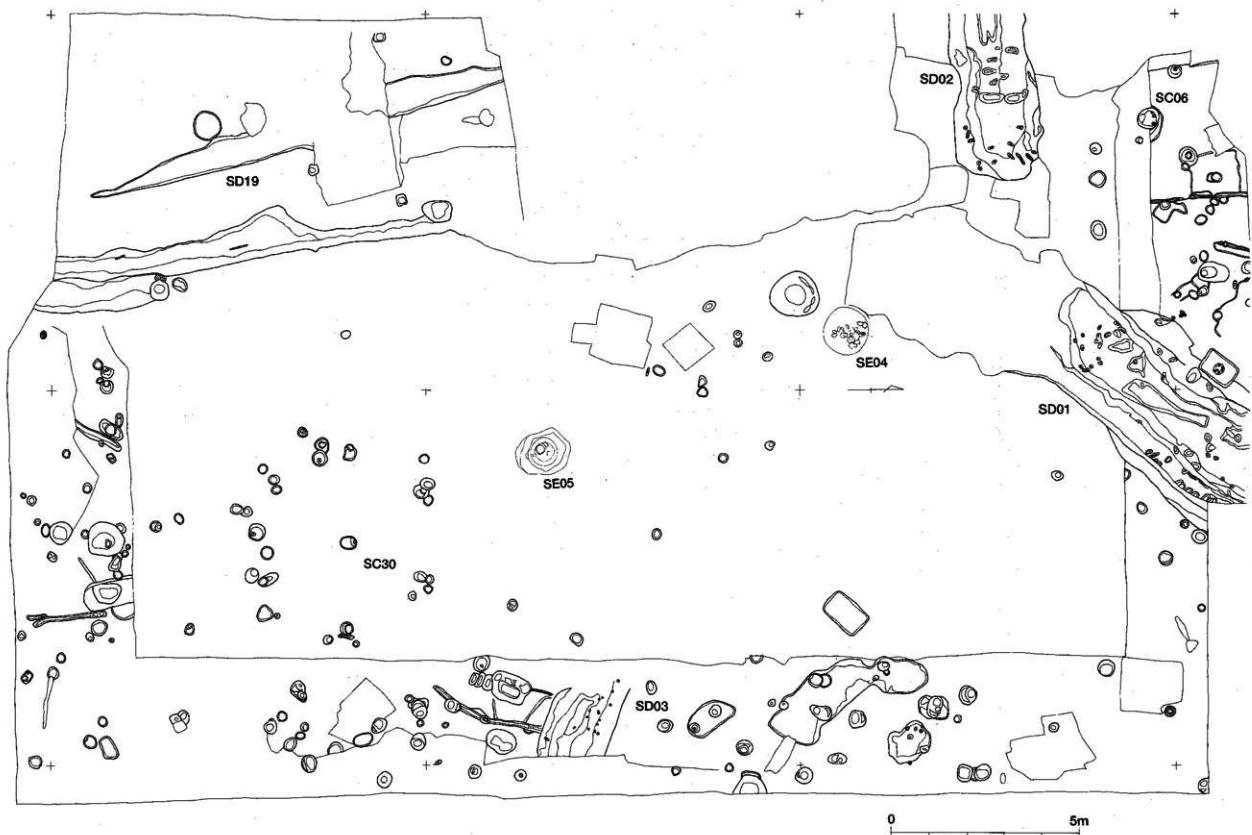
その他、住居址ではないかと思われる遺構はいくつか検出したが、残存状況は悪く、明確ではなかった。

②溝

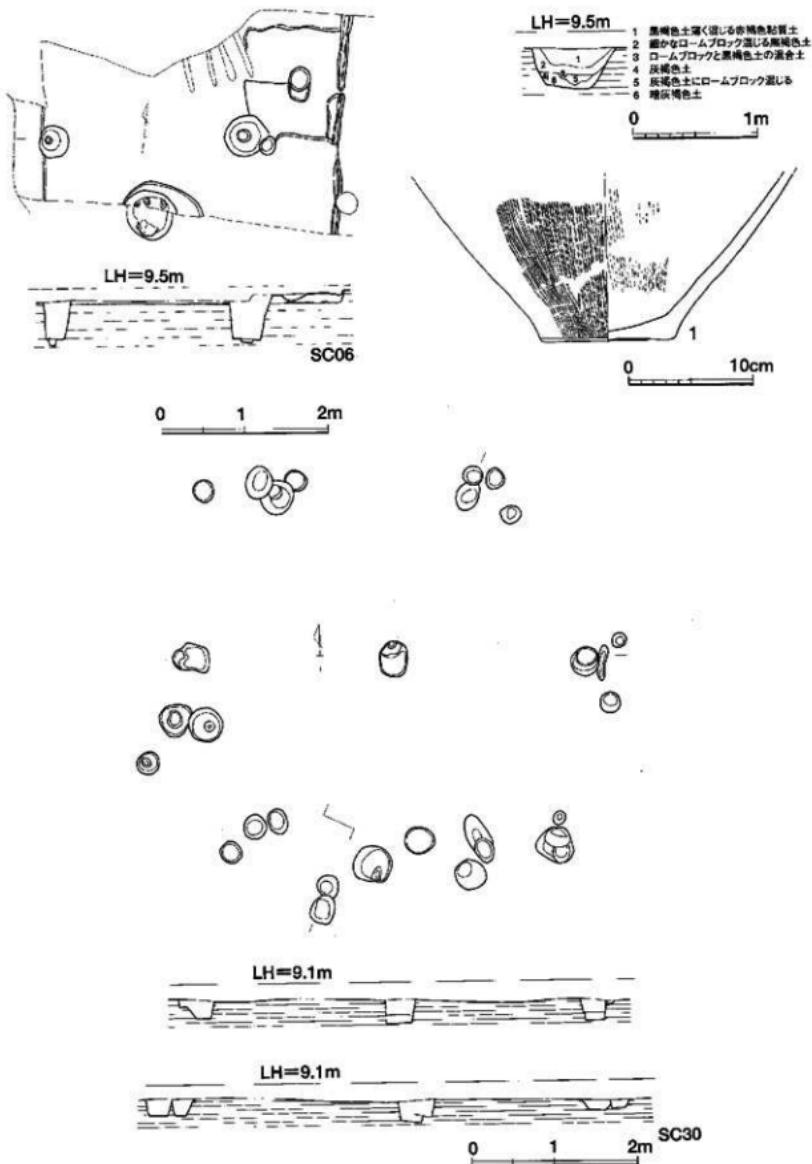
4条の溝を検出した。

SD01 (第6図)

調査区北端に位置し、N-38.7°-Eの方位で走る。幅3.6m、延長6.6m、深さ20~90cmを測る。土層断面を見てみると、SD01は一度掘り直された形跡がある。出土遺物には弥生土器や須恵器類が



第4図 造構平面図 (1/100)



第5図 SC06・SC30実測図(1/60)、出土遺物実測図(1/4)

ある。2～4層での出土が多く、須恵器が多い。6～9層は遺物は少なく、弥生時代土器の小片程度であった。古式土師器が出土していることから、弥生時代終末～古墳時代初頭に溝が掘削され、その後時間を経て溝の再掘削が図られ、7世紀初頭頃まで機能していたと考えられる。

出土遺物（第7図）

2～15は須恵器である。いずれも2～4層で出土している。2～7は杯である。2は口径11.8cm、3は口径12.4cm、器高4.0cm、4は口径12.0cm、5は口径10.0cmを測る。2～7はいずれも胎土は精緻で、灰褐色～暗灰褐色を呈する。底部外面は回転ヘラケズリ、外面上部から内面は回転ナデ、もしろくはナデで調整される。このうち5～7の底部外面にヘラ記号が確認されている。いずれもほぼ平行の2本の沈線が刻まれている。これらはいずれも6世紀末～7世紀初頭であろう。

8は蓋である。口径14.3cm、器高4.2cmを測る。外面上部はナデ、外面上部から内面下部までは回転ナデ、内面上部はナデで調整される。細砂粒と金雲母を少量含む胎土で、灰褐色を呈する。外面天井部付近に沈線が乱雑に絡み合ったようなヘラ記号がある。9、12は大甌の口縁部である。9は平行沈線の上部は斜位の平行沈線、下部にはカキメが施される。細砂粒や金雲母をやや多く含み、暗灰褐色を呈する。12は口縁部を衝面三角形状に作り、太めの回線を巡らす。ナデが施される。細砂粒少量と金雲母を多量に含む胎土で外面は灰赤褐色、内面は暗灰褐色を呈する。10は長颈甌である。胴部最大径は13.0cm、残高は15.0cmを測る。胴部に4条、頸部に2条の沈線が巡り、櫛目状の刺突文が施される。底部外面は回転ヘラケズリ、外面と内面は回転ナデで調整される。胎土は精緻で暗灰褐色を呈する。11は甌もしくは瓶の口縁部から頸部にかけての部分で、口径9.6cmを測る。外面にはカキメが施され、径1.0mm以下の砂粒を少量含む胎土で、外面は灰色、内面は暗灰色を呈する。

13は高环の脚部である。残高8.8cmを測り、中央部分には三条ないし四条の沈線が巡らされる。外面はナデで調整されるが、内面は紐を斜めに積み上げたような痕跡が残る。径2.0mm以下の砂粒と金雲母をやや含む胎土で、明赤褐色を呈する。14は提げである。回転ナデで調整される。径1.0mm以下の砂粒をやや含む胎土で、外面は暗灰褐色、内面は灰褐色を呈する。15は口縁部であると思われるが器種は不明である。径5.1cmを測る。精緻な胎土で灰褐色を呈する。

16は4層出土で、投弾である。全長3.7cm、断面径が1.8cm×2.0cmを測る。17は古式土師器の甌と思われる。内外面ともにタタキが見られる。径1.0mm以下の砂粒を多量に、金雲母を含む。18は古式土師器の広口甌の口縁部である。最下層出土である。口径11.0cmを測り、径3.0mm以下の砂粒を多量に、金雲母を含む胎土で、赤褐色を呈する。ナデが施される。19は9層出土。弥生時代甌の底部で、底径9.5cmを測る。径3.0mm以下の砂粒、金雲母を多量に含む胎土で赤褐色を呈する。20は4層出土。把手であろう。残長9.8cm、径1.9～2.6cmを測り、径2.0mm以下の砂粒と金雲母を多く含む胎土で淡赤褐色を呈する。

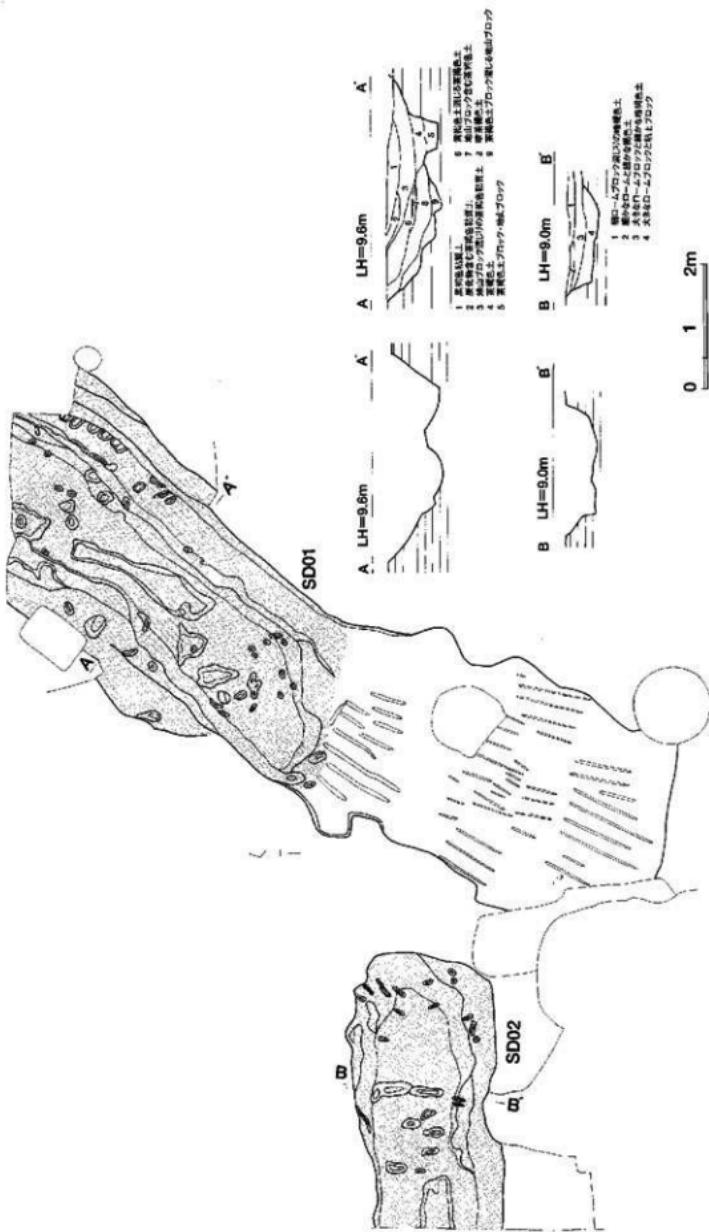
SD02（第6図）

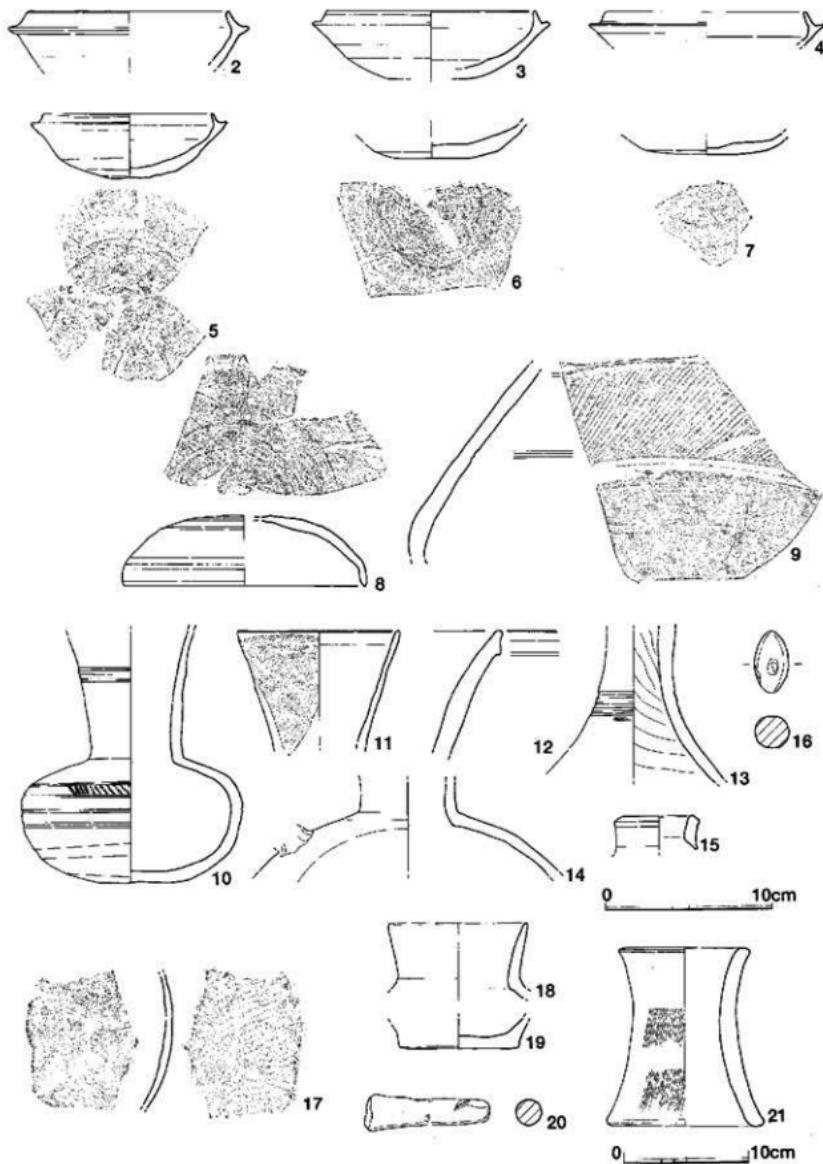
調査区北西端、SD01の西側に位置し、西壁に切られる。ほぼ東西方向に走る。幅2.3m、延長4.4m、深さ50cmを測る。断面はほぼ逆台形を呈し、地山ブロックと暗褐色土が混ざった埋土であり、短期間に埋め戻された様相を呈している。形状や位置関係から、SD01とSD02は一連のものであり、両者の間は陸橋として機能していたと考えられる。出土遺物は少ない。

出土遺物（第7図）

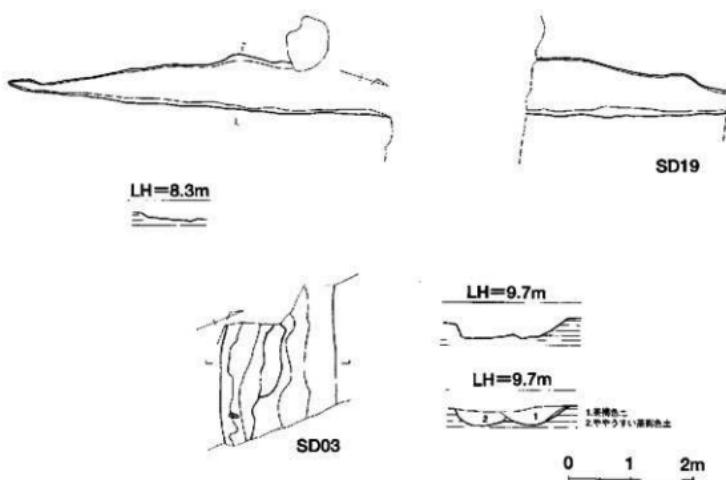
21は弥生時代の器台である。口径10.5cm、器高14.2cm、底径12.5cmを測る。外面に竪方向のハケメ、内面はナデで調整され、径5.0mm以下の砂粒、金雲母を多量に含む。赤褐色を呈する。

第6図 SD01・SD02実測図 (1/80)





第7図 SD01・SD02出土遺物実測図 (1/3、1/4)



第8図 SD19・SD03実測図 (1/80)

SD19 (第8図)

調査区西壁の南側付近に位置し、N-16.5°-W の方向をとって走る。幅 90cm、延長 11.5m、深さ 10cm を測る。上部が大きく削平されており、残存状況は悪い。須恵器の小片が出上している。

SD03 (第8図)

調査区東壁際中央よりやや南側に、壁とプール水槽搅乱に切られて位置する。N-68.0°-W の方向で走る。幅 1.8m、延長 2.1m、深さ 20 ~ 25cm を測る。土層断面から見て、再掘削されたと考えられる。出土遺物は少ないが、白磁片が出土しており、中世の溝と考えられる。

③井戸

2 基の井戸が検出されている。

SE04 (第9図)

調査区中央付近に位置する。平面は楕円形を呈し、長軸は 1.5m、短軸は 1.2m、深さ 3.35m を測る。底部付近に胴部を打ち削られた複合口縁甌が据え置かれていた。出土遺物から、弥生時代後期中葉の時期と思われる。

出土遺物 (第10図)

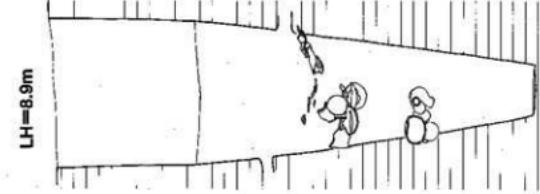
22 は比較的上層から出土した。甌である。底径 5.7cm、残高 17.5cm を測る。底部は平底でやや丸みを帯びる。頸部から胴部へかけて緩やかにふくらむ器形である。ナデで調整され、底部内面付近には指押さえ整形の痕跡が残る。径 3.0mm 以下の砂粒を多量に、金雲母を含む胎土で黄褐色を呈する。23 は井戸の底部付近で出土している。甌の底部で底径 8.3cm を測る。底部はやや丸みを帯びた平底を呈する。外面上にはハケメ痕が残り、底部内面には指押さえ整形の痕跡が残る。径 3.0mm 以下の砂粒を多量に、金雲母を含む。黄褐色を呈する。

第9図 SEO4・SE05実測図 (1/40)

SE05

0 1m

SEO4

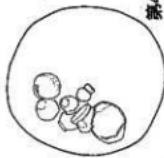
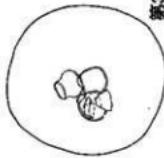


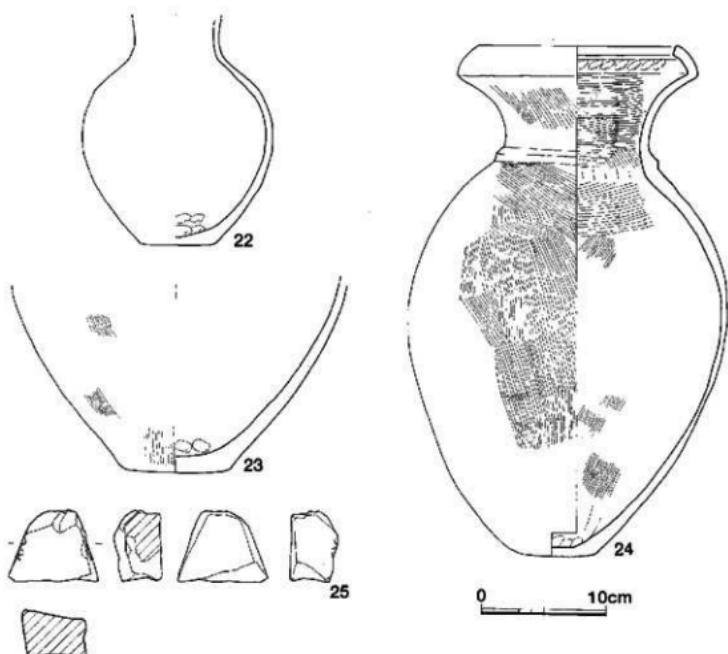
第1面

第2面

第3面

第4面





第10図 SE04 出土遺物実測図 (1/4)

24は井戸底部付近に埋置されていた複合口縁壺である。口径16.0cm、器高40.8cm、底径5.5cmを測る。口縁部は逆く字状に屈曲し、頸部から胴部へ緩やかにふくらむ。頸部と胴部の境目に断面三角形の突起が一条巡る。外面には各方向のハケメが、頸部内面と胴部内面上位には横方向のハケメが施される。底部内面には指押さえ整形の痕跡が残る。胴部中央が一部大きく欠損しているが、おそらく意図的に打ち欠かれたものと思われる。底部は丸みを帯びる。径2.0mm以下の砂粒を多量に、金雲母を少量含む胎土で、淡黄褐色を呈する。黒斑がある。以上、弥生時代後期中葉と思われる。

25は砂岩製の砥石である。残長7.0cm×5.6cm、厚さ3.0～3.7cmを測る。四面が砥面として使用されている。

SE05 (第9図)

調査区中央北西寄りに位置する。SE04の10mほど北西で検出された。平面はほぼ正円で、1.2m×1.25m、深さ3.9mを測る。上層の埋土は地山ブロックと暗褐色土が混合した土で、意図的に埋め戻された形跡がある。また、井戸の中位～底部より80cmほど上の間に、土器が多く投棄された状態で検出された。便宜上、土器を4群に分けて取り上げたが、時期差はさほどないものと思われる。出土遺物の大半は弥生時代中期後半であるが、後期初頭の壺が上層で出土しており、井戸の廃絶時期は弥生時代後期初頭まで下ると思われる。

出土遺物（第11～13図）

上器の種類ごとに説明を加える。

26、27は井戸の上層で出土した。26は甕棺の口縁部である。上層で出土した。口縁部はぐ字状に屈曲し、口縁部直下に断面三角形の突帯が一条巡る。口径89.0cmを測る。径2.0mm以下の砂粒、金雲母を少量含み、赤褐色を呈する。弥生時代中期後葉頃であろう。27は瓢形土器である。頸部と胴部の境日に一条、胴部上位に三条、断面三角形の突帯が巡る。径2.0mm以下の砂粒、金雲母を多量に含む胎土で、淡赤褐色を呈する。

28～39は頸部に孔が穿たれた広口壺である。この種類の壺について、常松幹雄氏が「奴国の大器—双孔広口壺—」（『福岡考古』第20号、2002年）の中で論じているが、福岡平野を中心に分布するこのタイプの土器を「双孔広口壺」としており、ここでもその名称を用いることとする。

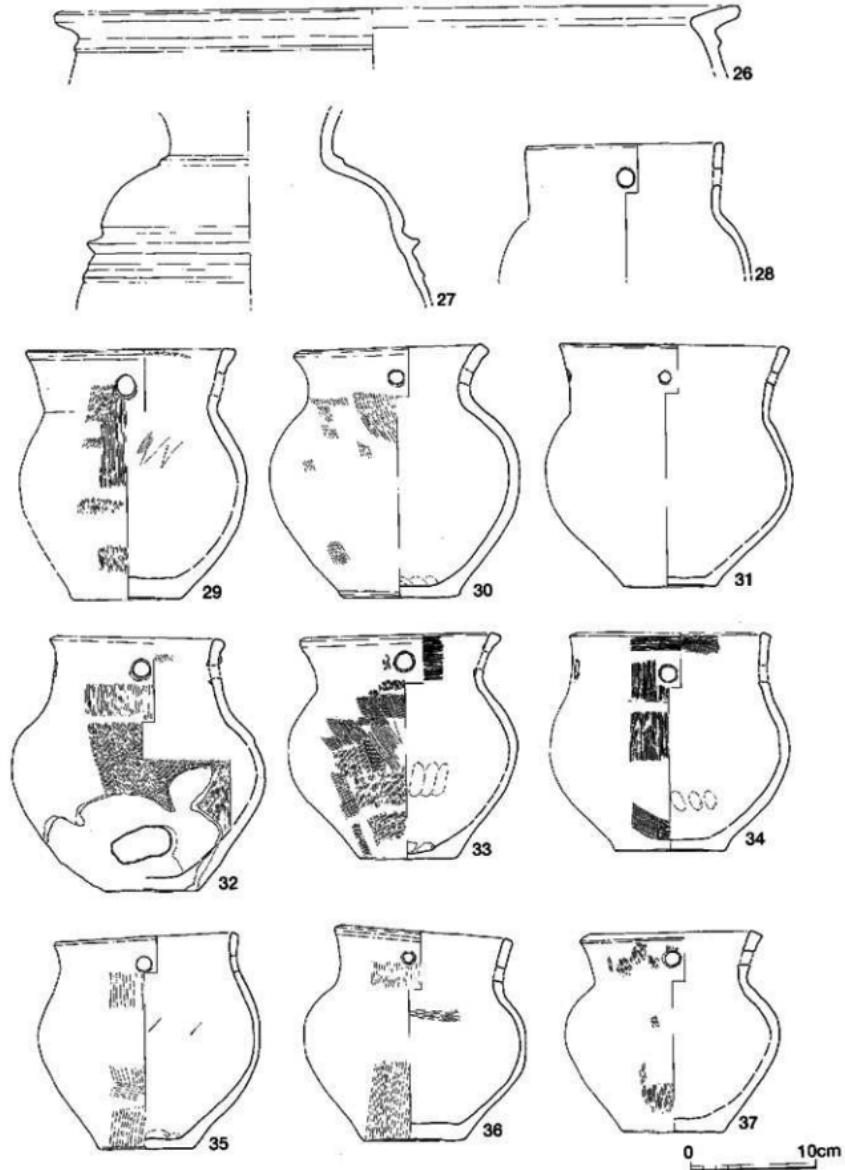
28～39の他、40～42は欠損のため孔は確認できなかったが、形態からおそらく双孔広口壺と推定される。28以外はいずれも魔棄土器群に含まれている。

法量で3群に分けられる。まず1群は（口径）12.8cm～18.3cm×（器高）19.3cm～20.0cmのもの、2群は（口径）13.0cm～15.9cm×（器高）15.9cm～17.9cmのもの、3群は（口径）12.3cm～14.3cm×（器高）12.6cm～13.5cmのものである。形態については、常松氏が先に述べた論功の中でA～Eの5類に分類しているが、ここで出土している上器には若干当てはまらないものがあり、改めて本地点出土土器での分類を行う。3類に分けられる。a類：口頭部はやや長めで直線的に外反するもの、b類：口頭部が短めでやや曲線的に強く外反するもの、c類：口頭部は直立するもの、である。以上の分類基準をもとに出土している双孔広口壺を記述する。

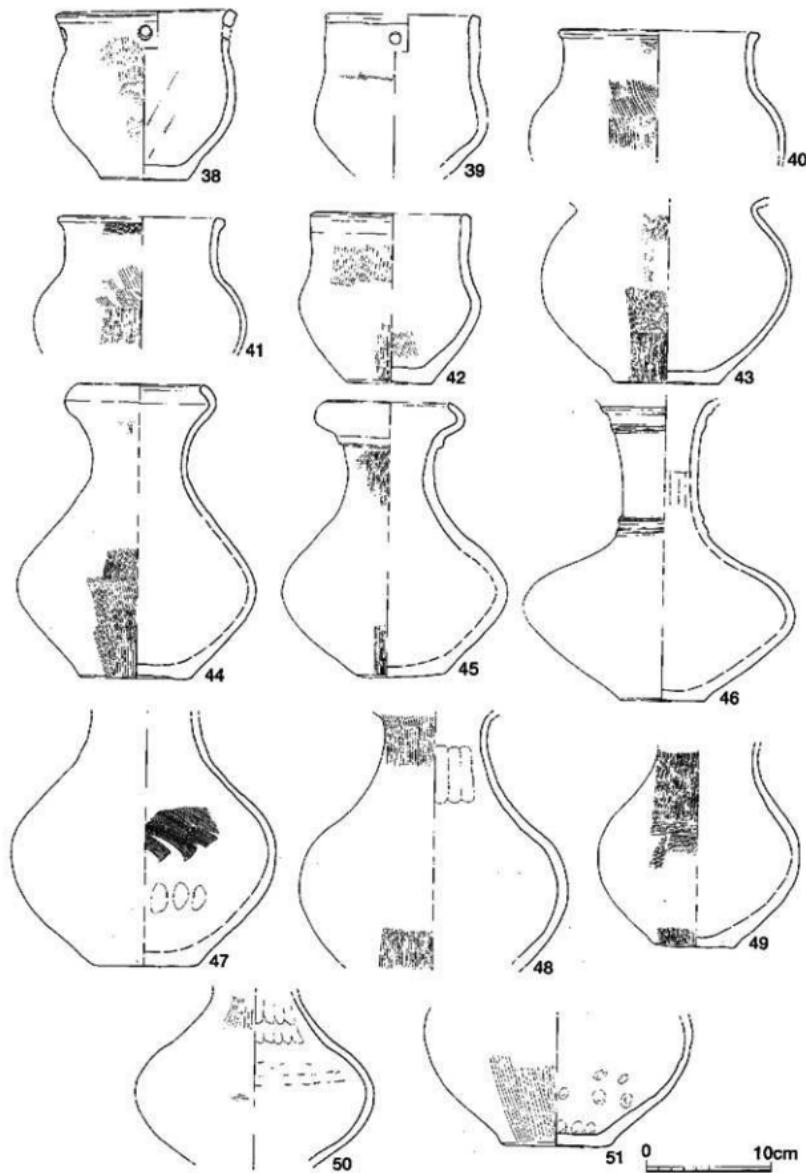
28は1-c類。上層出土である。口径15.8cmを測る。砂粒を多量に、金雲母を含む胎土で、明黄褐色を呈する。29は1-a類。外面には縱方向のハケメ、内面には一部ハケメとナデが施される。砂粒と金雲母を多く含む胎土で淡黄褐色を呈する。30は1-b類。外面にハケメが、底部内面には指爪さえ痕が残る。砂粒と金雲母をやや多く含む胎土で赤褐色を呈する。31は1-a類。砂粒を多量に金雲母を含む胎土で、赤褐色を呈する。32は1-c類。外面にハケメが施される。内面にも一部残る。また、胴部から底部にかけて打ち欠きが見られる。砂粒、金雲母、カクセン石を含む胎土で淡赤褐色を呈する。33は2-b類。34は2-c類。外面にハケメ、口縁部内面にハケメが残り、底部内面には指爪さえ整形痕が残る。砂粒と金雲母を多量に含む胎土で、丹塗り痕が残る。黄～赤褐色を呈する。35は2-c類。外面にハケメ、内面はナデで調整がなされ、底部内面には指爪さえのあとが残る。36は2-a類。内外面ともにハケメが残り、砂粒と金雲母を多量に含む。黄褐色を呈し、ススが付着する。37は2-b類。外面はハケメで調整される。砂粒と金雲母を多量に含む胎土で、赤褐色を呈する。

38は3-a類。外面はハケメのちナデ、内面はナデで調整される。砂粒を多量に、金雲母を少量含む胎土で淡黄～赤褐色を呈する。39は3-c類。砂粒を多量に、金雲母を含む胎土で、灰黄褐色を呈する。40は1-a類。破片のため孔は見られないが、双孔広口壺と思われる。外面に粗いハケメが施される。口径14.9cmを測る。砂粒を多量に、金雲母を含む。黄褐色を呈する。41は3-a類。これも孔は見られない。口径13.2cmを測る。外面にハケメを施したのち一部ナデ消す。砂粒を多量に、金雲母を含む。胎土で赤褐色を呈する。42は3-c類。外面はハケメを施したのちナデ、内面には一部ハケメ調整がなされる。砂粒を多量に、金雲母を含む。淡黄褐色を呈し、一部黒斑が外面に残る。

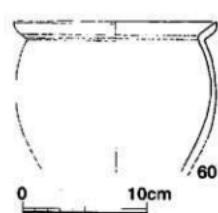
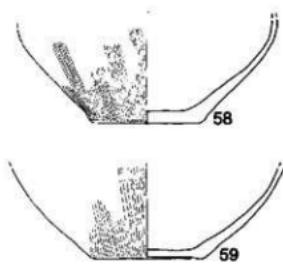
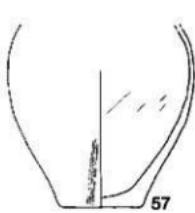
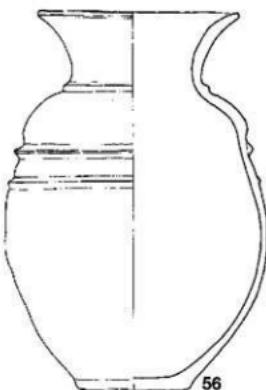
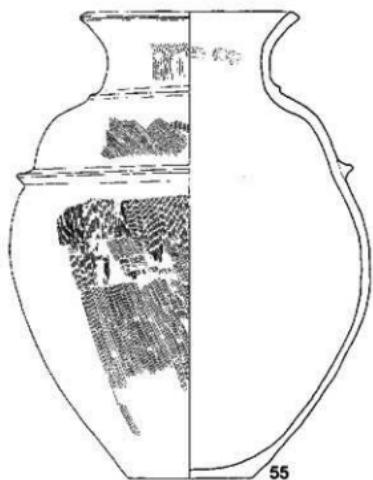
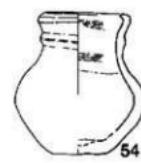
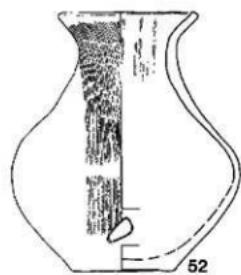
43～54は壺である。43は広口壺。胴部最大径20.0cm、残高14.9cm、底径8.6cmを測る。外面に



第11図 SE05出土遺物実測図1 (1/4)



第12図 SE05出土遺物実測図2(1/4)



0 10cm

第13図 SE06出土遺物実測図3(1/4)

ハケメが施される。径3.0mm以下の砂粒を多量に、金雲母を含む胎土で、黄褐色を呈する。44～46は袋状口縁壺である。44は口径9.7cm、器高25.5cm、底径8.8cmを測る。上部はハケメのちナデ、下部はハケメが施される。砂粒と金雲母を多量に含む胎土で赤褐色を呈する。丹塗り痕が残る。45は口径9.8cm、器高22.0cm、底径6.5cmを測る。口縁部下に断面三角形の突帯が一条巡る。外面に部分的にハケメが残る。砂粒、金雲母、カクセン石を多量に含み、淡赤褐色を呈する。丹塗りである。46は残高23.5cm、底径6.6cm。口縁部下に二条、頸部と胴部の境目に二条断面M字状の突帯を巡らす。胴部は大きく張る。ナデで調整される。砂粒を多量に、金雲母を含む胎土で、赤褐色を呈する。丹塗りである。

47は胴部最大径が21.0cm、残高20.0cm、底径8.3cm。内面にハケメと指押さえ痕が残る。砂粒を多量に金雲母を含む胎土で、淡赤褐色を呈する。48は胴部最大径21.3cm、残高20.0cm。胴部外面上部と底部付近にタテハケが施され、頸部内面には指押さえ痕が残る。砂粒と金雲母を多量に含み、淡赤褐色を呈する。49は胴部最大径16.0cm、残高16.0cm、底径6.5cm。外面にはタテハケ、胴部中央に横方向のミガキが施される。内面には棒状工具による擦形のあとが見られる。砂粒と金雲母を多量に含む胎土で、赤褐色を呈し、丹塗りが施される。50は肩部最大径19.1cm、残高14.0cm。外面にハケメが一部残り、内面には上部に指押さえ痕と、中位に粘土紐接合痕が残る。47～50は袋状口縁壺である。51は胴部最大径は21.3cm、底径8.7cm。外面にハケメ、内面に指押さえ痕が残る。砂粒と金雲母を多量に含む胎土で、黄褐色を呈する。

52、53は口縁部から底部にかけてS字状を描く器形の壺である。52は口径11.2cm、器高20.6cm、底径8.1cm。外面にハケメ、内面は一部ハケメが残る。底部付近に1ヶ所穿孔される。砂粒と金雲母をやや多く含む胎土で、外面は黄褐色、内面は赤褐色を呈する。丹塗りである。53は口径8.5cm、器高14.5cm、底径6.2cm。砂粒を多量に、金雲母を含む胎土で赤褐色を呈する。

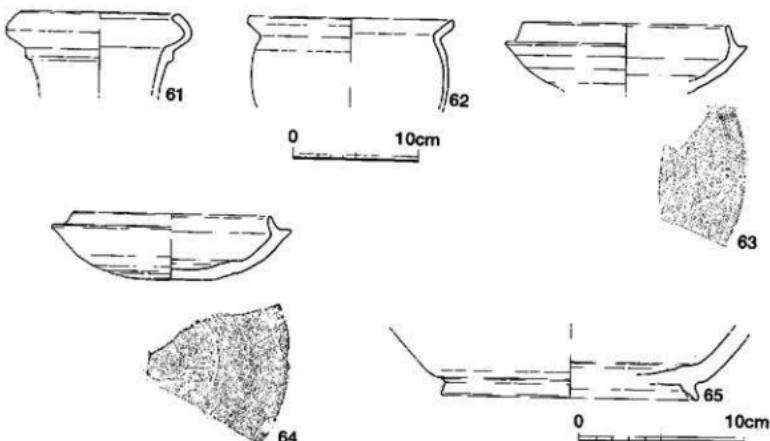
54はミニチュア上器の壺。口径6.1cm、器高11.3cm、底径4.0cm。頸部に断面三角形の突帯が一条巡る。内面上部にはミガキが施される。砂粒と金雲母をやや多く含む胎土で茶褐色を呈する。一部黒斑が残る。55、56は瓢形土器である。55は口径16.2cm、器高37.5cm、底径10.0cm。頸部と胴部上位に一条ずつ断面三角形の突帯が巡る。外面にはハケメ、内面には一部ハケメが残る。砂粒多量に、金雲母を含む胎土で、黄褐色を呈する。一部丹塗り痕が残る。56は口径16.0cm、器高30.2cm、底径7.8cm。頸部に一条、胴部上位に二条の、断面三角形の突帯が巡る。砂粒と金雲母をやや多く含む胎土で、淡赤褐色を呈する。

57～59は甕もしくは壺の底部。57は残高14.2cm、底径6.4cm。外面に一部ハケメ、内面はヘラケズリ様調整痕が残る。砂粒を多量に、金雲母を少量含み、淡赤褐色を呈する。外底に黒斑が残る。58は底径9.0cm、外面にハケメが施される。砂粒を多量に、金雲母を含む胎土で、外面は黄褐色、内面は赤褐色を呈する。59は底径9.1cm、外面にハケメが施される。砂粒、金雲母、カクセン石を含む胎土で、黄褐色を呈する。外面に黒斑が残る。いずれも平底を呈する。

60は埋土中出土。口径16.3cm、残高11.7cm。口縁部はく字状に屈曲する。砂粒と金雲母をやや多く含む胎土で、外面は暗灰褐色、内面は明赤褐色を呈する。外面には黒斑が残る。弥生時代後期初頭であろう。

④その他出土遺物（第14図）

遺構面や攪乱から出土した上器である。61は袋状口縁壺である。口縁部下に断面三角形の突帯を一条巡らせる。口径12.6cm。砂粒を多量に、金雲母を含む胎土で、明淡赤褐色を呈する。62は甕で



第14図 その他出土遺物実測図 (1/4、1/3)

ある。口縁部がく字状に彫曲して開く。口径 16.0cm。砂粒を多量に、金雲母を含む胎土で、明淡赤褐色を呈する。63～65は須恵器の杯。63は口径 12.2cm、残高 4.2cm。砂粒を多量に含み、灰褐色を呈する。外底は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデで調整される。外底に「X」状のヘラ記号が刻まれる。64は口径 11.7cm、器高 3.9cm。砂粒をやや多く含み、灰褐色を呈する。外底は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデで調整される。外面に不定方向の沈線が刻まれている。いずれも 7世紀初頭頃か。65は高台付きの杯である。高台径は 15.5cm を測る。外面は暗青灰色、内面は暗灰褐色を呈する。8世紀頃であろう。

3. 小結

以上の結果をふまえて簡単にまとめてみたい。

本調査地点で検出された遺構・遺物の時期は、弥生時代中期後半、弥生時代後期中葉、古墳時代後期、古代、中世である。

弥生時代中期後半には住居址 (SC06) と井戸 (SE05) が挙げられる。SE05は個別遺構の説明で記述したように、30個体以上の土器がまとめて廃棄されていたが、とくにその土器群の中には双孔広口壺が15個体含まれていた。このタイプの土器は福岡市、とくに比恵、那珂遺跡を中心として出土しているが、那珂遺跡では、第23次地点と第50次地点で出土している。第23次地点では、環濠としている SD44の一括廃棄土器群より2点検出された。そのうち1点には鳥の像が線刻されている。報告の中で、この廃棄土器は祖靈祭祀の現われとしている。一方、第50次地点では、祭祀土坑としている SK03、井戸 (SE04、SE11) から出土している。いずれも上器がまとめて廃棄されており、祭祀的な意味合いが強い。

常松氏は先の論功中、双孔広口壺の出土一覧を提示しているが、これによる限り、一遺構中の出土数は多くて5点、1～2点が通常のようである。また、溝、土坑出土もあるが圧倒的に井戸出土が多い。今回は井戸から出土しているが、その出土数はこれまでの例の中でも群を抜いて多い。中には丹

塗りを施したものや打ち欠きの見られるものが含まれ、また、意図的にまとめて廃棄された状況が伺える。他の例と同様、実用的に用いられていたというよりは、祭祀を目的としたものであったと推定される。

SE05 の一括土器群は弥生時代中期後半を主体としているが、埋土中より後期初頭頃の甕が出土しており、井戸の廃絶時期は後期初頭まで下ると考えられる。

弥生時代後期中葉には SE04 が挙げられる。この井戸の底部からは、胴部が打ち欠かれた複合口縁甕が検出された。そのほかには日立った遺物は出土していない、井戸祭祀としては、先の SE05 とは様相が異なる。祭祀の性格が異なるのであろうか。後期中葉の遺構はこれのみであるが、弥生時代中期後半～後期中葉まで集落が継続していた状況が伺える。

SD01 と SD02 は一連の遺構とした。溝の形状と出土遺物から古墳時代後期の古墳の周溝と推定される。当初この 2 条の溝は、第 70 次地点でも検出されている方形周溝墓かと思われたが、溝の屈曲具合や、SD01 の出土遺物から古墳の周溝とした方が適切であると思われる。本調査地点の北に位置する第 44 次地点でも 6 世紀後半の古墳の周溝が検出されており、周辺における後期古墳の分布が考えられる。

古代は概期の須恵器が 1 点出土したのと、中世は溝（SD03）が一条検出されたのみであるが、両時期の遺構は第 41、44、70 次地点でも確認されている。

本調査地点は、搅乱されていない面では標高はほぼ 9.0 ～ 9.5m を測る。第 41、70 次地点と比較して若干低くなるが、第 48 次地点よりは高い。また、第 72 次地点では 9m ほどであるから本調査地点から南西付近で地形の落ちを確認できる。

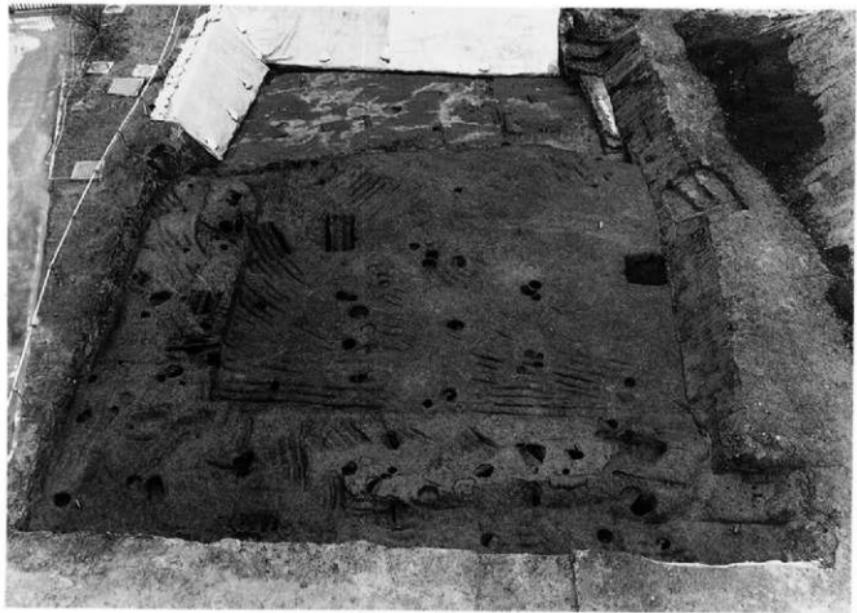
本調査地点周辺の状況に限ってみてみると、本調査地点の遺構の時期は、西側に位置する第 41 次、70 次地点と連動している。しかし、北側に位置する第 44 次、27 次、南西及び南側に位置する第 48 次、72 次地点では、古墳時代以降の時期を主体とし、また、東側に位置する第 38 次、61 次地点では弥生時代の甕棺墓が検出されている。つまり、弥生時代の集落は本調査地点より西側に広がり、それに伴う甕棺墓域は第 38、61 次地点に現れている東側に分布していると思われる。また、古墳時代の集落は南、西側に、古代の状況は散逸的であるが、中世は北、南西側に分布するといった状況が現在までの調査結果から見て取れるのではないか。もちろん、今後の周辺の調査で遺跡の様相が改変され、また、明らかになっていくであろう。

参考文献

- 下村哲・荒牧宏行『那珂遺跡 4』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第 290 号」1992 年
下村哲『那珂 18』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第 518 号」1997 年
その他那珂遺跡の各報告書を参考にした。



1. 調査区北側全景（東から）

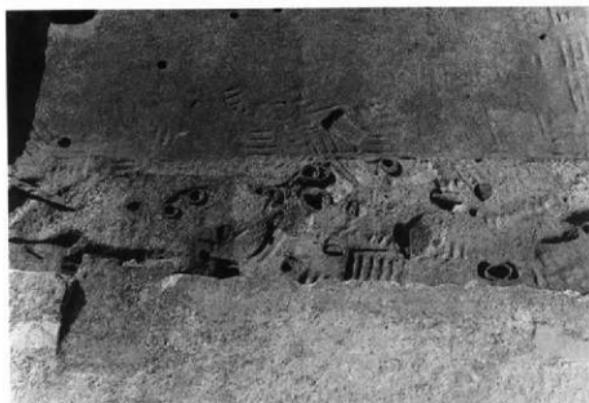


2. 調査区南側全景（東から）

図版 2



1. 調査区北側東端（南から）



2. 調査区北側東端
(東から)



3. SC06 (東から)



1. SC06 (北から)



2. SC06 内 P3
(東から)



3. SC06 貼床除去後
(北から)



1. SD01 (北東から)



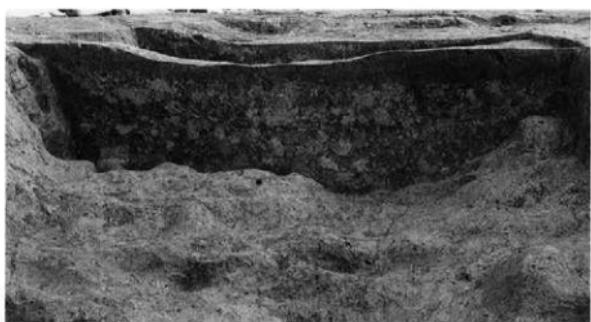
2. SD01 遺物出土状況
(南東から)



3. SD01A-A' 土層断面
(南西から)



1. SD02 (西から)



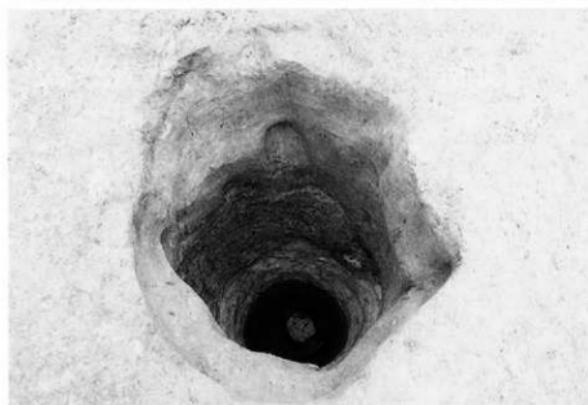
2. SD02B-B' 土層断面
(西から)



3. SD01・SD02
(東から)



1. SD03 土層断面
(東から)



2. SE04 遺物出土状況
(北から)



3. SE04 遺物出土状況
(東から)



1. SE04 完擺状況（北から）



2. SE05 遺物出土状況
第1面（南から）



3. SE05 遺物出土状況
第2面（北から）



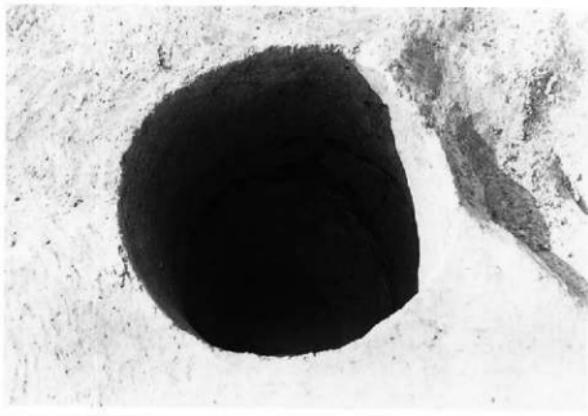
1. SE05 遺物出土状況
第3面（北から）



2. SE05 遺物出土状況
第4面（北から）



3. SE05 遺物出土状況
(南から)



1. SE05 完壊状況
(北から)



2. 那珂中学校
(調査区上空から)



3. 調査区上空から
北西を望む



1. 調査区上空から
南西を望む



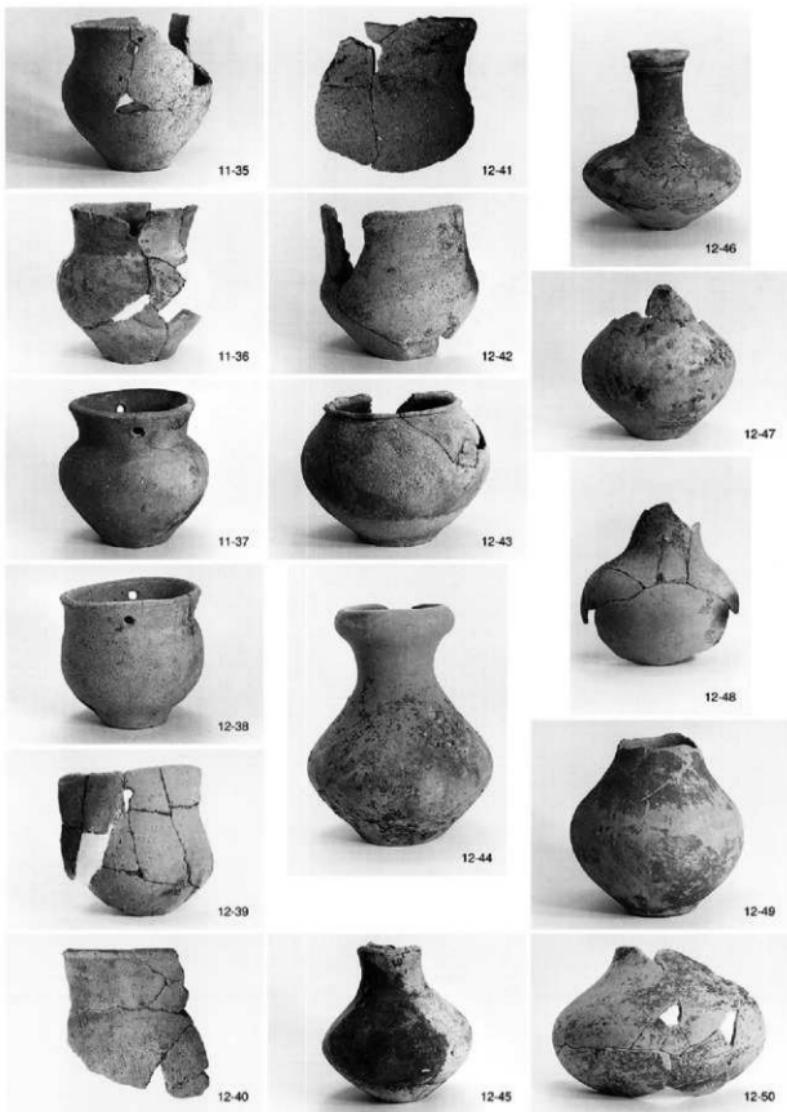
2. 調査区上空から
南を望む

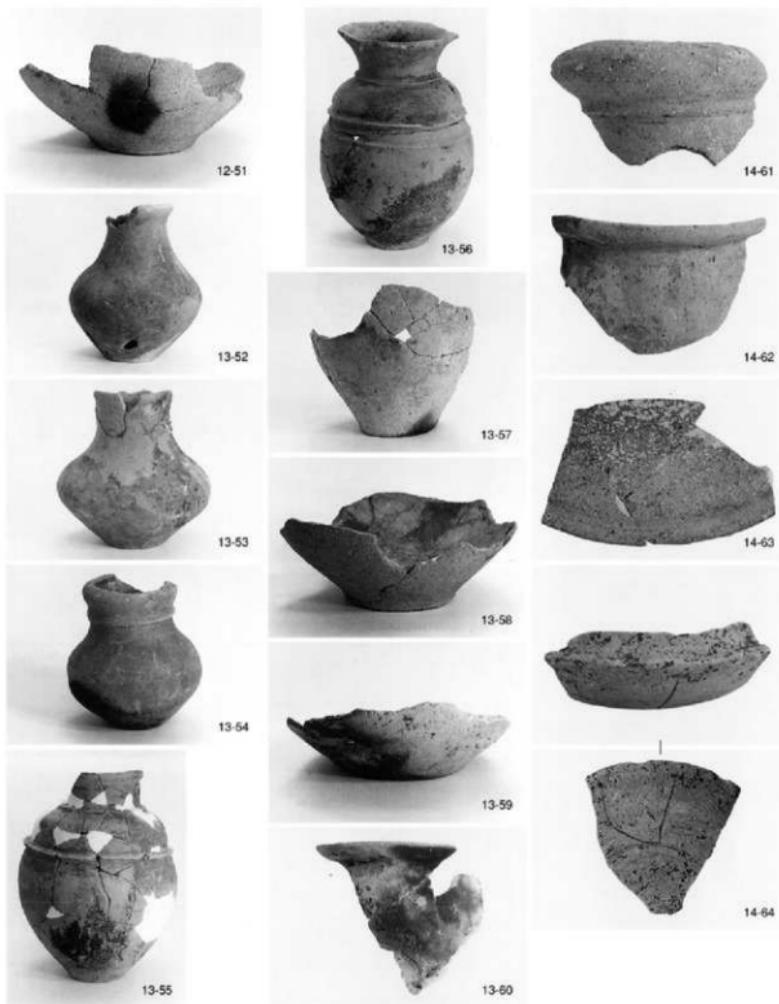


3. 調査区上空から
南東を望む









福岡市埋蔵文化財調査報告書第 756 集

那珂 33

—那珂遺跡群第 79 次調査報告—

2003 年(平成 15 年)3 月 31 日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区大神 1 丁目 8-1
(092)711-4667

印刷 大野印刷株式会社
福岡市博多区桜田 2 丁目 2 番 65 号
(092)414-1515

